

宮古島市立北小学校自主公開授業研究会・佐藤学講演会

(1) 単元名： いろいろな形の面積

(2) 本時の目標： 円を既習の図形に等積変形した図形から、円の面積を求める公式の意味を理解する。

ついに、佐藤学先生が宮古島の地を踏んで教育を語る時が来た。数年前から、「学びの共同体」に関心を抱き、いつか佐藤先生を宮古へお招きし、宮古島で頑張る先生方へこれからの教育の指標と、激励を込めた講演会を開催したい。北小の平良校長先生以下、数人の教師たちの夢の実現である。去年から関わっていた私も感無量につきる！

本日は土曜日開催とあって、市内の先生方や、市教育委員会、地区教育事務所関係者も多数参観に来られました。午後から高学年4クラスの授業公開の後に、佐藤先生の講演会が実施されました。「学び合う」授業風景がどのように参観者の目に映っていたのであろうか？…

宮古島に新たな教育改革の風の吹き始めを感じた。



(時間は時刻)

【デザインシート[授業者より]全文】

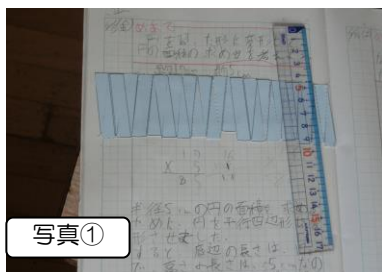
本日はご参観いただき本当にありがとうございます。本時は第3時で、第1時は「円の面積の見当をつける。」活動を通して「曲線の部分の面積がどう求めるのか分からない！」というモヤモヤ感で、第2時では、「円を今まで習った図形に変形してみよう」という活動で「変形すると面積が求められた！」でも、子どもによっては「誤差があるな…」という気づきを学習してきました。本時では、この変形した図形から公式へと結びつける学習です。そこで始めから公式を提示して、『なぜ、この公式になるのか？』を考えることで、前時で変形した図形の縦・横・底辺・高さなどが「円の構成要素で表すとどうなるか」を意識して解決していくのではないかと考えています。



「学び合い」では常々「つまづき」や「もがき」の中で、受け身になったりあきらめたり人任せになってしまう子どもへの配慮や全体で共有する時に「つなく」「もどす」という教師の役割が未熟な部分が多くありますので、いろいろアドバイスをいただきたく思います。よろしくお願いいたします。

どうです、授業への思い、子ども達への思い、なんといっても授業者の謙虚な姿勢がうかがえますね。この謙虚な姿勢こそが、子ども達にとっての「学び合い・支え合う」自分たちの授業づくりの土台になっているのではないのでしょうか。この文面を読んでどのような教師像、授業風景がイメージできますか。

13:30 【前時の復習から】 32分割した円を長方形に変形したところまでを確かめる。



写真①

写真①、前時までのノートである。円を変形（等積）することで、何とか「およその面積が求められそう」の写真である。写真②、前時までの学習を問答で簡単に振り返り、さっそく本時の共有課題の提示である。

『なぜ、半径×半径×3.14で求めることができるのか？』。写真③、32分割した円を長方形に並べる。授業者は、黒板での作業も子ども達にあずけた。3名の子どものたどたどしい作業になぜか心が和む。



写真③

写真④、13:38 共有課題である。みんな自分のノート記録や、変形図形を手掛かりに考える。どのグループを見てもボソボソ、ブツブツである。一人もとり残される子が見当たらない。みんな夢中になって語り合っている。たてが半径であることは、容易に理解できた。問題は横の長さの表記である。「つまづく・まよう・もがく」…。



写真②



写真④

子ども達の対話や仕草から、N先生の日常の学級経営、授業づくりを垣間みることができる。圧巻！

13:55 【共有課題を確認する】

もがく、まよう、つまずく、もう一回、なぜ、なんで？グループで時間を惜しむようにぶつぶつと言葉が語られ、考えが交流する。素晴らしいクラスである。どのグループ、誰一人見てもみんなが「分きたい」に向かっている。この子ども達のがむしゃらさを「学習意欲」と言うのではないだろうか。文字や言葉よりもこの子達の素朴な「分きたい」を大いに評価したい。

ほんとに活字で意欲が評価できるのだろうか。パフォーマンス評価…彼らの言葉や仕草や行為を評価の対象としたい。



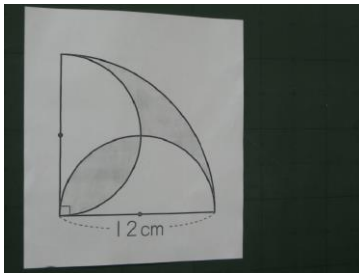
【ユニバーサルデザイン】

男の子の足元を見てほしい。机の高さを揃えたら足が浮いてしまった。そこで踏台の配慮である。…誰よりも親が安心しますね



14:00 【ジャンプ課題の提供】

たては「半径」、横の長さは、円周の半分なので「半径×3.14」になります。だから・・・子どもの発言に教師はうなずきながら、教室の仲間達に「これでいい」と確認を問う。「正解です。」の言葉は教師の口から発せられない。曖昧なままジャンプ課題へ（写真下）。確認しておきたいことは、子ども達は今日の今、円の公式の意味を扱ったばかりで、練習問題や、確認問題も経験しないまま、この課題である。



ちょっとした気づきや、ひらめきも見逃せない状況である。皆が必至である。参観者のことも気にせず夢中になる。やりがいを与えられた。



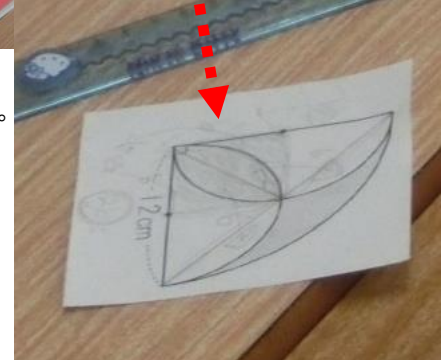
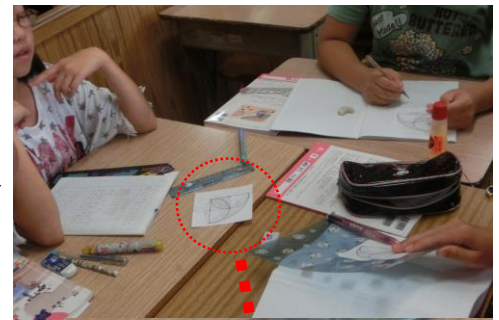
14:15 【授業終了】時間が来たので終了。

授業者は終了前に一声、「どうする、先生が解答しますか？」…当然子ども達の返事は「ノー！」である。「やりたい」「自分たちで解決したい。」…参観者の先生方はどう思ったであろう？

「教師はしっかり解答し、しっかり説明してあげるべきである。」とする教師からは、完全に反する行為である。

実は、ここに示した4枚の写真は、授業終了後の写真である。子ども達の「やりたい」に寄り添う授業者の姿である。正解にかけ離れた話であるが黒板の前に数名集まりまだもがいている。教師はしっかり聴いてあげている。難題である、今日で理解すること、今日で分かることを目的とするならば、このような授業デザインは仕組みまいであろう。授業者は意図的に子ども達の一生懸命に夢中になれる課題を仕組んだのである。参観者にクラスの子どもの夢中になって難題に向かい、支え合う姿を見てもらいたかったのではないだろうか。

学び合う教室でこだわっていきいたいことがある。一人残らずすべての子ども達が「難題と向かい合い、仲間と向かい合い、自己と向かい合い」だれもが安心して「分からない」を言える学級であること。



うっすらと三角形を作図したのが見えます。後少しですね。今日初めて公式を知った子ども達がここまでたどり着いたのです。素晴らしい！



N先生、お疲れさんでした。去年から持ち上がりの6年生ですね。それにしてもすごい「がむしゃらさ」が見えて参観していてもとっても微笑ましい風景でした。いよいよ北小の6年生も「もがき」を楽しみとする学びの快樂へ向かっているようでした。簡単な問題でも出したら子ども達はきっと物足りなさを感じる授業になるでしょうね。教材研究頑張ってください。本日は心より感謝いたします。 国頭学びの会ゆい